



城東図書館 2023年1月20日～2月15日実施

まちのひと 加納 恵美子さんの紹介本リスト

朗読家

赤い蠟燭と人魚	小川未明 / 著	童心社
<p>小学生の頃、学校の図書室で、いろいろな本に夢中になりました。でも、この物語を読んだときに感じた、なんとも表現しようのない悲しみの感覚と、赤いろうそく色のイメージは、あまりに鮮烈で特別でした。どうしようもなく切なく辛い物語なのに、それでもなぜか美しく感じられたのでした。</p> <p>小川未明さんの「みめい」という名前の響きも、またやさしく魅力的に思えて、私の空想の中では、繊細なほっそりしたお姉さんのイメージが勝手に出来上がってしまい、大人になってから、写真を拝見して驚いてしまいました。失礼な話ですね。</p> <p>何百という物語を残しておられて、すでにパブリックドメイン(著作権などがフリー)となっているため、朗読の場でも、たくさんの作品を読ませていただいています。この『赤い蠟燭と人魚』は、まだ朗読に使わせていただけてはいないのですが、いつか必ず朗読したい物語です。</p>		
花さき山	斎藤隆介 / 作	岩崎書店
<p>この物語を最初に読んだのは小学生の頃で、短編童話集『ペロ出しチョンマ』の中に入っていたからだったように思います。</p> <p>そのときは、いくつかの物語の中のひとつ、という印象だった気がします。社会人になって、職場から同僚と参加した研修会の最後に、語り部の方が、この『花さき山』を“ばば”の扮装で語られました。それは、すっかり自分が“あや”になった感覚で“ばば”に語りかけられていたひとときでした。しばらく余韻が抜けませんでした。なにか深いところで救いあげられた思いでした。一緒にいた同僚たちも、同じ感覚を味わっていたようです。</p> <p>しばらく経ってその職場を離れるとき、その同僚に絵本『花さき山』を贈りました。そして私自身も、今も手元に置いています。また、振り返れば、あの語りを聞いたことが、私にとって朗読(語り)をやろうと思った最初のきっかけでした。</p>		
泥かぶら	眞山 美保/原作, くすのき しげのり/文, 伊藤 秀男/絵	瑞雲舎
<p>この絵本と出逢ったのは、5～6年前、大人のための絵本イベントに参加したときでした。会場に入って、その日紹介される絵本が並ぶ中に、その表紙を見た瞬間「これはお芝居の？」と思わず声が出ていました。主催者の方に「そうそう。知ってるの？」と訊かれて、それまで長い間すっかり忘れていた記憶が蘇ってきました。</p> <p>小学生か中学生のとき、学校公演のお芝居で観た『泥かぶら』。その“泥かぶら”と呼ばれた少女の物語に感動し、またお芝居のもつ魅力に惹かれて「この劇団に入りたい」と思いました。思ったものの、それを実行に移すだけの行動力は持っていなかったのですが、そのままいつしか忘れてしまっていたけれど、絵本のタイトルを見た瞬間に思い出したことに、自分でも本当に驚きました。そして、そのイベントで読み聞かせてくださったときにも、お芝居を観た当時の自分の感情があふれました。今の自分にとって大切な一冊です。</p>		
こころの処方箋	河合 隼雄/著	新潮社
<p>高校生の頃、友人が『無意識の構造』という新書を貸してくれました。それをきっかけに、河合隼雄さんに興味をもち、買ったり、借りたりしながらたくさんの著書を読みました。今でも、家にある中で一番多いのは河合隼雄さんの本です。この機会に数えてみたところ20冊以上、本棚にありました。この『こころの処方箋』は、その中で2番目に自分で買ったエッセイ本です。(1番目は『こころの天気図』)そして、友人に貸したり、プレゼントした回数が一番多い本。ふだん、貸したまま行方不明になった本を買い直すことはあまりしないのですが、この本は買い直して手元にあります。</p> <p>「100%正しい忠告はまず役に立たない」「マジメも休み休み言え」「ものごとは努力によって解決しない」などの小見出しからも感じられるユーモアと、人間へのあたたかな思いをもって語られる、まさに心の処方箋です。</p>		

Solo Time 「ひとりぼっち」こそが 最強の生存戦略である	名越康文/著	夜間飛行
<p>著者の名越康文さんを知ったのは、15年以上前に放送されていた『グータン』という深夜番組でした。精神科医としてゲストの心理分析やカウンセリングをされていた記憶があります。番組の中で「気持ちが沈んでいる人に寄り添うときには、温かい飲み物を一緒に飲みながら話をきくといい」というお話をされていたのが印象的でした。身体と心は繋がっているから、まずは一緒に温かいカップを手を持ってゆっくり飲んで、ほっと温まってもらおうのだというお話をききながら、自分の心があたたまのを感じました。当時はまだ著書を出されていなかったように思いますが、その後、出版された何冊かの本を読ませていただきました。</p> <p>この本のタイトル「ひとりぼっち」という言葉には、さみしいイメージもありますが、ひとりの時間が大切な私にとっては、それでOKと言われたような安心感があり大切にしています。</p>		

『みをつくし料理帖』シリーズ	高田 郁/著	角川春樹事務所
<p>夫の転勤に伴い神奈川で暮らしていた頃のこと、立ち寄った書店で目に入った「八朔の雪」「花散らしの雨」という巻のタイトルに心惹かれ、手に取りました。</p> <p>大阪の水害で両親を失った少女“澪”が、そのあと移り住んだ江戸で、料理人として奮闘する物語。大阪と江戸の水のちがいや、嗜好のちがいに戸惑いながらも、工夫を重ね、ひとつひとつ困難を乗り越えていく姿に励まされました。新たな巻が出るのが楽しみになり、続きを読むことが関東で暮らす日々の支えになってくれています。そして、とうとう完結を迎えたとき、これ以上ない結末に喜ぶのと同時に、取り残されたようなさみしさでいっぱいでした。でもその翌月、私も急に大阪へ戻ることが決まり、また、引越し先の最寄り駅が、澪ちゃんの幼馴染“野江”ちゃんと同じ“野江”駅だったことにとても驚き、この土地にご縁を感じました。きっとずっと忘れられない物語です。</p>		

- 『センスオブワンダー』レイチェル・カーソン
- 『落下する緑』田中啓文
- 『プリンセス・トヨトミ』万城目学
- 『精霊の守り人』シリーズ 上橋菜穂子
- 『グイン・サーガ』シリーズ 栗本薫

大阪市立城東図書館

大阪市城東区中央3-5-45 06-6933-0350

<https://www.oml.city.osaka.lg.jp/>